

# 中国と日本の復讐劇における死の描写

## ——元曲「趙氏孤児」劇と『仮名手本忠臣蔵』を例に——

林 雅清

中国と日本の復讐劇の代表格である、元曲「趙氏孤児」劇と人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』、それぞれにおける登場人物の「死」の描写を分析することにより、両作品ないし両芸能の特徴の一端を明らかにすると共に、中国人と日本人の死生観や宗教観の相違についても検証する。

キーワード：復讐劇、死、元曲、趙氏孤児、忠臣蔵

### 1. はじめに

人を感動させる小説や戯曲などの通俗文芸には、登場人物の「死」が描かれているものが多い。演劇や映画などの視覚芸能においても然りである。ストーリーの展開上必要となる登場人物の死は、読者や観衆の「喜怒哀楽」の感情を強く喚起し、様々なベクトルで人の心を動かす最も強力なエネルギーを持っていると言えよう。

特に、中国と日本の「復讐劇」には、その復讐譚が始まるきっかけとなる人物の死と、復讐譚の終結に不可欠な仇役の死はもちろんのこと、それ以外にも複数の人物の死を描き、「見どころ」となる場면을複数用意している作品も多い。

これは、古今東西の文芸・芸能に通ずる特徴と考えてよいかもしれないが、本稿では特に、中国と日本の古典戯曲・伝統演劇に焦点を絞り、それぞれの特徴について分析することにする。

作品としては、中国からは元曲（元雜劇）の「趙氏孤児大報讐」（趙氏の孤児、大いに讐を報いる）を、日本からは人形浄瑠璃の作品として

作られ後に歌舞伎でも上演された『仮名手本忠臣蔵』をまず取り上げ、それぞれの登場人物の死の描写を比較・分析し、その上で、関連する他作品についてもいくつか見ていく。

なぜこの両作品を取り上げるかと言うと、筆者が以前、「元雜劇と人形浄瑠璃——「趙氏孤児」劇と『仮名手本忠臣蔵』を中心に——」<sup>1)</sup>で論じた通り、成立年代は異なれど元雜劇と人形浄瑠璃（および歌舞伎）は共に東アジア海域社会における中世ないし近世の都市芸能かつ大衆芸能であり、いずれも「語り物」・「音曲」・「奏楽」・「演劇」の4種の芸能形式が融合した「完成された舞台芸術」であるという芸能分野としての共通点と、元曲の「趙氏孤児大報讐」も人形浄瑠璃作品の『仮名手本忠臣蔵』も共にその後の両国の他芸能や文学作品に多大な影響を及ぼした復讐劇の代表格であり、いずれも相当な人気を博したという作品としての共通点が見られるからである。しかも、両作品には、その復讐の始終に直接的に係わる人物以外にも多くの登場人物が死んでいくという共通点も存在する。

したがって、この両作品における死の描写を比較分析することによって、それぞれの芸能や作品としての特徴をより明確にすると同時に、

日中両国の死生観や宗教観に論及することで、東アジア海域社会における文化的価値観の位相についても若干の考察を加えてみたい。

## 2. 中国の復讐劇「趙氏孤児大報讐」

元の紀君祥（生没年不詳）撰の元曲「趙氏孤児大報讐」<sup>2)</sup>（以下、「趙氏孤児」劇と称する）の主題である「趙氏孤児」物語は、春秋時代の晋国で発生した歴史事件を題材にした復讐譚で、『春秋左氏伝』や『国語』、『史記』「趙世家」などに典拠が見られる。また、前漢の劉向撰『新序』「節士篇」・『説苑』「復恩篇」、唐の李瀚『蒙求』や南宋の洪邁『容齋隨筆』などにも関連する故事が記されている。明の余邵魚の講史小説『列国志伝』（後に明の馮夢龍によって『新列国志』、さらに清の蔡元放によって『東周列国志』に改編・改称）にも「趙氏孤児」物語があることから、『列国志伝』の素材となった「列国物」の平話（話本）の中にも、同様の物語があったと推定されている<sup>3)</sup>。元曲以外の戯曲作品としては、元末明初に作られた作者不詳の南戯「趙氏孤児記」、明の徐元撰の伝奇「八義記」のほか、崑劇に「八義記」の折子戯、京劇に「搜孤救孤」（「八義図」）や「興趙滅屠」、川劇に「陳英救姑」や「趙氏孤児大報讐」があり、漢劇・滇劇・晋劇などの地方劇にも同様の戯曲がある<sup>4)</sup>。さらに、2010年には『趙氏孤児』（監督：陳凱歌、邦題：『運命の子』）として映画化され、2013年には歴史ドラマ『趙氏孤児案』がCCTV-1で放送されている。これほど様々な文芸・芸能に取り入れられ、現在まで連綿と演ぜられているところを見れば、「趙氏孤児」物語の中国における受容度・人気度の高さは容易に想像できよう。

その「趙氏孤児」物語が最初に舞台化され、視覚芸能の作品として完成したのが、この元曲「趙

氏孤児」劇である。よって、「趙氏孤児」劇は中国における復讐劇の代表的作品と言える。

以下、「趙氏孤児」劇の梗概を折毎に紹介する。

### 【楔子】

春秋時代、晋国の大将の屠岸賈は、主君の靈公を唆し、大臣の趙盾一族を皆殺しにする。公主（王女）の夫であった、趙盾の子趙朔も自害を強要され、妊娠中の公主は宮中に軟禁される。

### 【第一折】

公主は男児を産み、趙朔の遺言通り「趙氏の孤児」と名付ける。そして、出入りの医者程嬰を呼び出し、孤児を託して自害する。程嬰は孤児を葉籠に隠して屋敷を出るが、屠岸賈の指示で屋敷を見張っていた將軍韓厥に見とがめられる。問答の末、韓厥は程嬰を見逃し自害する。

### 【第二折】

屠岸賈は趙氏の孤児が生きていると知り、国中の赤子を皆殺しにするよう命ずる。程嬰は趙盾の旧友の公孫杵臼に相談し、生まれたばかりの自分の子を趙氏の孤児として公孫杵臼に預け、孤児を我が子として育てることにし、屠岸賈に公孫杵臼が孤児を匿していると密告しに行く。

### 【第三折】

程嬰が屠岸賈に訴え出ると、屠岸賈は程嬰を連れて公孫杵臼を捕えに行き、程嬰に公孫杵臼を拷問させ、偽の孤児を見つけ出して惨殺する。公孫杵臼は自害し、屠岸賈は程嬰を自邸に住まわせ、程嬰の子を自分の養子にすると約束する。

### 【第四折】

20年後、屠岸賈の養子「屠成」として育てられていた程嬰の子（趙氏の孤児）は、成人して「程勃」と名乗る。程嬰は経緯を絵巻物に画いて程勃に見せ、屠岸賈が実の両親と趙氏一族の仇であると知らせる。程勃は復讐を決意する。

### 【第五折】

当時の主君、悼公は、程勃の訴えを聞いて上卿の魏絳を遣わし、屠岸賈を捕えに行かせる。程勃は屠岸賈を捕え、魏絳が酷刑に処すと決める。程勃は悼公から「趙武」の名と爵位を賜り、程嬰と韓厥也称えられ、大団円となる。

本劇は歴史事件を題材にしたものであるが、史書に描かれている史実と比べてみると、本来は霊公と趙盾との間にあった軋轢や暗殺計画などの対立がすべて屠岸賈と趙盾の対立になっていたり、他人の子を孤児の身代わりにするのを程嬰の子にしていたり、15年後に趙武の復権を景公に願い出て屠岸賈への復讐の成就させる韓厥が死んでしまったりと、その内容に多くの相違がある<sup>5)</sup>。ただ、小説や演劇などの通俗芸能に史実との符合性を求めることに意味はない。あるいはその相違箇所には作品が成立した時代背景や作者の主義主張などが影響している場合があるかもしれないが、とりわけ人々の「娯楽」が最大の目的である視覚芸能の作品に求められるのは、題材の歴史的信憑性よりも、その描写・表現方法である。観衆に最も訴えたい部分、すなわち「見どころ」をどこに置くか、それが作品の創作において最も重視される点であろう。

「趙氏孤児」劇の「見どころ」は、明らかに公主や韓厥、公孫杵臼ら登場人物の死の場面にある。なぜなら、復讐劇であるにもかかわらず、「復讐」の場面描写が至って簡素であり、逆に上記の登場人物の死の場面が詳細に描かれているからである。第五折において、主君から許可を得た程勃（趙氏の孤児）は、難なく仇の屠岸賈を捕え、上官に当たる魏絳が「令人，與我將這賊釘上木驢，細細的剮上三千刀，皮肉都盡，方纔斷首開腔，休着他死的早了」（者ども、この賊を木驢に釘付けにし、体を細かく三千ほどに切

り刻め。皮と肉がすっかり削ぎ落ちてから、首を落として胸を切り開くのだ。決してすぐに死なせるでないぞ）と命ずるだけで、程勃が直接手を下すわけでもなく、目の前で処刑されるわけでもない<sup>6)</sup>。しかも、第四折で程勃は、屠岸賈が実は生みの親の仇だったと知ると、20年間育ての親として慕ってきたにもかかわらず、心理的葛藤は一切描かれずに、「兀的不氣殺我也」（なんと腹立たしいことか）と言って倒れた後、すぐさま復讐を決意するのである。一方、上記の登場人物らの死の場面は、いずれも自分の命を犠牲にして趙氏の孤児を救うという、感動的な場面として詳細に描写されている。

### 3. 「趙氏孤児」劇における死の描写

「趙氏孤児」劇において、登場人物のせりふで死が明らかになる人物（趙盾や屠岸賈など）を除き、舞台上で死ぬ場面が描かれている人物は、趙朔・公主・韓厥・公孫杵臼の4人である。四折構成が基本の短い劇である元曲において、これほど次々と登場人物が死ぬ作品は少ない。

なお、趙朔や公主の死は、「復讐譚が始まるきっかけ」とも考えられるが、正末が演じる韓厥や公孫杵臼と同様に主要な登場人物の死であり、いずれも自害によって死ぬことから、4人の死の場面をすべて見ていくことにする。

まず、楔子で自害させられる趙朔であるが、公主に向かってお腹の子に「趙氏の孤児」と名付け、その子が成人したらきっと仇を討たせるようにと遺言した後、「仙呂・賞花時」の曲に乗せて次のようにうたったあと、死んでいく。

【幺篇】故郷に、埋葬されることもなく、（せりふ）公主よ、私がおまえに頼んだ話、しかと憶えていておくれ。（公主せりふ）わか

りました。(趙朔うた) 言い含め、涙の雨が  
ほほ濡らし、一言話せば悲しみ一つ。わが  
子が成長したならば、われら三百人のため、  
きっと仇を討たせておくれ。(死ぬしぐさ、  
退場)<sup>7)</sup>

元曲では曲をうたえるのは「正末」や「正旦」という主役のみである。しかし、趙朔の脚色は『元曲選』本では「冲末」である。楔子では正末・正旦以外がうたうこともあるが、本劇では趙朔は正末に準ずる役であると考えられよう<sup>8)</sup>。

さて、この「遺言」こそが、「忠義」や「孝」にもまして「復讐の動機」となるのであるが、その点については前掲の拙稿で論じたためここでは割愛し、その死の直後の場面を見てみる。

(公主せりふ) 趙朔さま、胸が張り裂けそうですわ。(退場)(使者せりふ) 趙朔は短剣で自害し、公主は屋敷に軟禁した。主君に報告しなければ。(詩) 西戎そのかみ神獒献じ、趙一門、運命からは逃がられず。哀れ公主は囚われの身に、趙朔は、短刀を手に自害するのみ。(退場)<sup>9)</sup>

趙朔の死の場面で舞台上にいるのは、本人以外に公主と屠岸賈の使者のみである。使者は敵の配下であるため趙朔の死を悼む必要はないが、公主は妻である。にもかかわらず、目の前で夫が自害するのを見て発するせりふが、「趙朔さま、胸が張り裂けそうですわ」だけである。そして、この後特に葬送儀礼のようなものも行われることも、行われたというせりふやト書きもなく、次の場面、第一折へと進む。

第一折における公主の死の場面も見てみよう。

……程嬰や、あなたはずっとわが家に入りしてきましたが、あなたを悪く扱ったことはないはずです。なんとかこの子をひそかに連れ出し、この子が成長したら、趙一族の仇を討たせてくれませんか。……(跪くしぐさ、せりふ) 程嬰よ、どうか憐れに思っておくれ。趙家三百人の仇討ちは、すべてこの子にかかっているのです。(程嬰せりふ) 公主さま、お立ちください。もし私がひそかに若さまを連れ出せたとしても、屠岸賈が知れば、公主さまに趙氏の孤児を差し出すよう求めるでしょう。その時、もし公主さまが「程嬰に預けました」と言おうものなら、私の一家が殺されるのはまだしも、若さまも無事では済みません。(公主せりふ) しかたありません。程嬰、あなたに安心して行ってもらいましょう。(詩) 程嬰や、慌てないでくださいね、わらわの言葉、涙なしには聞けません。この子の父は刀で命を落としてしまい、(腰帯を手に取り、首をくくって死ぬしぐさ、せりふ) しかたない、この子の母も跡を追って死にましょう。(退場)(程嬰せりふ) まさか公主さまが首をくくられるとは。ぐずぐずしてはおれんぞ。薬箱を開けて、若さまを中に入れ、生薬で覆っておこう。天よ、趙家三百人が全滅し、たった一人の子だけが残されたことを憐れみたまえ。今からそなたを助けよう。そなたに福分があれば成功するが、もし見つければ命は無く、私の一家も無事では済まんぞ。(詩) 程嬰思うに、実に哀れな趙一族。幾重にも囲む砦に相似たる、禁中の元帥府から抜け出せば、厄災の網より逃げたも同然よ。(退場)<sup>10)</sup>

公主は孤児を託した程嬰を無事に逃がすため



に自ら首をくくるのであるが、程嬰との切羽詰まったやり取りによって、その死の悲劇性がよりクローズアップされている。

ただ、その死の直後の描写に注目すると、やはり目の前で死んでいった公主に対して、程嬰は「まさか公主さまが首をくくられるとは」と言うだけで、すぐさま逃げ出す算段をする。退場詩も含め、公主に対する追悼の言葉はない。

同じく第一折、韓厥の死の場面も同様である。

【賺煞尾】賊の下、尋問されるぐらいなら、この身で証を立てようぞ。あの階にぶつかって、自ら命を断ってくれん。さすれば芳名名の万古に香ることなきも、鉏耨と共に忠魂とならん。おい程嬰、日夜お世話を懇ろに。その子こそ、趙一門の最後の芽。大きく育った暁には、かつての話をして差し上げよ。仇討ちを、果させるのはもちろんのこと、大恩人のこのわしを、ゆめゆめ忘れるではないぞ。(自刎、退場)(程嬰せりふ) あっ、韓將軍が自害された。將校に知られ屠岸賈に報告されたらどうしよう。孤児を抱いて早く逃げねば。(詩) 韓將軍こそまことの忠臣、孤児のため、自ら首はね身まかれり。今や私は心置きなく歩を進め、太平荘にて手を打たん。(退場)<sup>11)</sup>

目の前で韓厥に死なれた程嬰は、「あっ、韓將軍が自害された。將校に知られ屠岸賈に報告されたらどうしよう」と焦るだけで、韓厥の死を悼むせりふは一言もない。

最後に、第三折の公孫杵臼の死の場面である。

【鴛鴦煞】やつがれの、七十で死ぬは老い過ぎも、幼子の一つで死ぬはあまりに若い。わしら二人は共に死に、万世の後に名を留め

ん。残る程嬰任せたぞ、非業の死、遂げし趙朔忘るるな。実に光陰矢のごとし。疾く仇討ちし、やつを千万と切り刻み、そう易々と許すでないぞ。(公孫杵臼ぶつかるしぐさ、せりふ) 階に、頭ぶつけて死を求めん。(退場)(兵卒報せるしぐさ、せりふ) 公孫杵臼が石段にぶつかり死にました。(屠岸賈笑うしぐさ) 老いばれめ、死んだのであれば、もうよいわ。<sup>12)</sup>

公孫杵臼の場合、狂言が発覚してはいけないため、程嬰は屠岸賈の前で公孫杵臼の死を悼むことができないが、これは舞台芸術である。独白の形で死を悼むせりふを言うことや、死を悼むしぐさをト書きで記すことも可能であろう。しかし、そのような描写は一切見られない。

以上、趙通・公主・韓厥・公孫杵臼の4人の死の描写を見てきたが、いずれの場面も、死にゆく人物の心理描写は、そのしぐさやせりふ、あるいはうたの中に相応に描かれているものの、その「死」に対する追悼の描写は見られない。あるいは、その人物が「死科」(死ぬしぐさ)をして「下」(退場)する間に、周りの人物が死を悼むしぐさをしているという可能性も考えられるが、少なくとも文字資料の中には、追悼らしき描写はほとんど存在しない。これは、本劇以外の元曲作品すべてに共通する点でもある。ただ、本劇はこれらの人物の死が物語の展開上極めて重要となる「復讐劇」である。彼らの「死」によって観衆の哀しみと怒りの感情が倍增され、その負の感情が主役ないし主役側の人物によって仇役にぶつけられ復讐が完結することにより、はじめて観衆の溜飲が下がるのである。その負の感情が大きければ大きいほど、復讐が完結した時の快感も大きくなり、「復讐劇」としての作品の娯楽性が高まる。すなわち、登場人物

の死が悲惨であればあるほど、その死を悼む気持ちが強ければ強いほど、仇役に対する憎悪の感情も強くなり、復讐することの正当性も強くなる。にもかかわらず、復讐劇である「趙氏孤児」劇では、「死」を悼む描写はほぼ無きに等しい。すなわち、作者ないし観衆は、それほど死に対する「追悼」を望んでいなかったと考えられよう。

では、日本の復讐劇ではどう描かれているのか。章を改めて詳しく見ていきたい。

#### 4. 日本の復讐劇『仮名手本忠臣蔵』

『仮名手本忠臣蔵』は、将軍徳川綱吉の元禄時代、播磨赤穂藩主の浅野内匠頭が高家旗本の吉良上野介に対して江戸城殿中松の廊下で刃傷に及び切腹、遺臣の大石内蔵助以下赤穂浪士四十七士が吉良邸に討ち入って主君の仇を討った歴史事件「元禄赤穂事件」を題材とした作品であるが、幕府の手前、事件をそのまま描くことを憚り、時代を『太平記』、すなわち室町初期に設定し、登場人物をすり替えたものである。

作者は二代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳の3名で、寛延元年8月(1748.9)に大坂の竹本座で人形浄瑠璃として初演、大成功を収め、同年12月(1749.1)に大坂中の芝居で歌舞伎版が初演され、翌寛延2年2月(1749.3)には江戸の森田座で上演、以降現在に至るまで、人形浄瑠璃・歌舞伎共に繰り返し上演されている。

元禄赤穂事件を題材にしたり挿入したりした作品には、『仮名手本忠臣蔵』以前にも、事件翌年の元禄16年に上演された近松門左衛門の歌舞伎『傾城三つ車』、宇治加賀掾の浄瑠璃『難波染八花形』、竹本筑後掾の浄瑠璃『傾城八花形』をはじめ、宝永2年(1705)刊の西沢一風の小説『傾城武道桜』、宝永5年(1708)刊の『傾城播

磨石』、宝永7年(1710)に大坂篠塚庄松座で上演された吾妻三八の歌舞伎『鬼鹿毛無佐志鑑』、京都夷屋座の歌舞伎『太平記さゝれ石』と『硝後太平記』、近松門左衛門の浄瑠璃『碁盤太平記』、紀海音の浄瑠璃『鬼鹿毛無佐志鑑』、江島其積の小説『けいせい伝授紙子』や『忠義武道播磨石』など、数多く存在する。

ただ、『仮名手本忠臣蔵』は特に好評を博したようで、宝暦8年(1758)の操り評判記『女大名東西評林』には全部白抜きの「大極上上吉」、同じく安永6年(1777)の『儀多百蟲辰』には「上上吉」と、いずれも『国姓爺合戦』に次ぐ評判であったと記されている。そして、この『仮名手本忠臣蔵』以降、元禄赤穂事件を題材にした作品を「忠臣蔵物」と呼ぶようになる。その「忠臣蔵物」の作品は、人形浄瑠璃や歌舞伎以外にも、講談、浪曲、小説、そして映画やテレビドラマに至るまで、それこそ枚挙に遑がない。

なお、享和4年(1804)の操り劇書『竹本豊竹浄瑠璃譜』に「古いといひいひ見物も見るは忠臣蔵なり、是より後忠臣蔵の増補数々新浄瑠璃出れども、古元の仮名手本にまさりしはなし、扱々奇妙なる浄瑠璃也」とあるように、人形浄瑠璃の「忠臣蔵物」もその後数多く作られるが、『仮名手本忠臣蔵』に勝る作品は出なかったとのこと、要するに、『仮名手本忠臣蔵』が「忠臣蔵物」の元祖にして、集大成とも言える<sup>13)</sup>。

以下、『仮名手本忠臣蔵』の梗概を記しておく。

#### 【大序】「鶴岡の饗応」(兜改め)

鎌倉鶴岡八幡宮の造営に伴い、将軍足利尊氏の代参として弟の直義が下向。そこで新田義貞の兜の奉納を巡って高師直と桃井若狭之助が口論になり、義貞の兜を知るといふ塩谷判官高定の妻、顔世御前が呼ばれる。兜を奉納した後、顔世を口説く師直を見た若狭之助が機転を利かせ

て顔世を去らせると、師直は若狭之助を罵る。

【二段目】「諫言の寝刃」（松伐り）

桃井家の家老加古川本蔵の妻、戸無瀬と、娘の小浪が主君の話をしているところへ、小浪の許婚の大星力弥が登城時刻を告げに来る。若狭之助は明日師直を討つと本蔵に告白。本蔵は同意の後、妻子を振り切り師直の下へ馬を飛ばす。

【三段目】「恋歌の意趣」（館騒動）

本蔵は師直に賄賂を贈り、共に城内へ。遅れて塩谷判官が早野勘平を伴って登城。さらに、お軽が顔世から預かった師直への返書を持って現れ、勘平を呼び出し返書を預け、その後勘平と密会する。師直は判官に手渡された返書から顔世の拒絶を知り、判官に毒づく。判官は堪えかね刃傷に及ぶも、居合わせた本蔵に抱き留められる。密会中の主君の大事を知った勘平は切腹しようとするが、お軽に止められ逐電。

【四段目】「来世の忠義」（判官切腹）

判官は切腹。駆けつけた家老の大星由良之助が形見の刀に仇討ちを誓う。残された顔世と、由良之助ら塩谷家の家中の者は、判官の遺体を光明寺へ葬り、屋敷を明け渡す。

【五段目】「恩愛の二つ玉」（山崎街道）

お軽の実家に身を置く勘平は、塩谷家旧家臣の千崎弥五郎に出逢い、仇討ちへの参加を懇願。お軽の父与市兵衛は、金が入用な勘平のためにお軽を祇園の一文字屋へ身売りさせることにし、都合百両のうち五十両を前金にもらい受け帰宅途中、斧定九郎に金を奪われ殺される。定九郎は勘平が猪を狙って撃った鉄砲玉に当たって死ぬ。勘平は慌てて薬を探し定九郎の懐を探り、五十両の入った財布を見つけ、奪い去る。

【六段目】「財布の連判」（与市兵衛住家）

勘平が帰宅すると一文字屋が来ており、事情を聴く内に勘平は、奪った財布が一文字屋のものとなり、舅を撃ったと早合点する。お軽が連

れて行かれ、獵師たちが与市兵衛の遺骸を運んでくる。怪しんだお軽の母は勘平を責め立てる。そこへ千崎と原郷右衛門が登場、勘平は子細を語って切腹するが、与市兵衛の傷が刀傷と判明、疑い晴れて仇討ちの連判状に血判し、死ぬ。

【七段目】「大臣の鎗刀」（一力茶屋）

塩谷家元家老の斧九太夫は師直に取り入り、祇園の一力茶屋へ由良之助を偵察しに来る。由良之助は狂態を演じ味方をも欺くが、息子の力弥が届けた書状を読んでいるところを二階からお軽、縁の下から九太夫に盗み読まれる。気づいた由良之助はお軽を身請けする。お軽に再会した兄の寺岡平右衛門は、由良之助の本心を知り、仇討ち計画を知ったお軽を殺そうとしたところ、由良之助が出てきて兄妹の忠誠を称え、平右衛門の帰参を許可し、九太夫を殺す。

【八段目】「道行旅路の嫁入り」

戸無瀬と小浪の道行。力弥に嫁ぐため、山科の大星家閑居を目指して東海道を行く。

【九段目】「山科の雪転」（山科閑居）

祇園から朝帰りした由良之助は、雪転をして力弥に焦らぬよう説く。由良之助の妻、お石は、訪ねてきた戸無瀬と小浪に、祝言を拒む。小浪が悲観して死のうとすると、お石は祝言を承諾するが、殿中で判官を引き留めた本蔵の首を引出物に所望する。そこへ虚無僧姿の本蔵が現れ、わざとお石らを挑発し、力弥に槍で刺される。その後、由良之助が現れ、本意を語った本蔵は、引出物にと高邸の絵図面を贈り、息を引き取る。

【十段目】「発足の櫛笄」（天河屋）」

堺の廻船問屋、天河屋義平が討入り道具の調達を隠すため妻を離縁し、息子が殺されかけても口を割らなかった義心に感じ入った由良之助は、「天」と「河」を討入りの合言葉と決める。

【十一段目】「合印の忍兜」（討入り）

塩谷家の浪士四十六人は師直邸へ討入って本

懷を遂げ、討ち取った師直の首を判官の霊前に供える。突然襲ってきた高家家臣の薬師寺次郎と鷺坂伴内を力弥が討ち取り、終劇となる。

## 5. 『仮名手本忠臣蔵』における死の描写

本作品において死の描写がある登場人物は、塩谷判官（四段目）、与市兵衛と斧定九郎（五段目）、早野勘平（六段目）、加古川本蔵（九段目）、そして仇役の高師直と配下の薬師寺次郎および鷺坂伴内（十一段目）である。

ここでは、「趙氏孤児」劇との比較の観点から、特に「復讐」のきっかけとなる塩谷判官の死と、元家臣の早野勘平の死、仇討ちを成功へと導く加古川本蔵の死の描写について見ていきたい。

まず、塩谷判官の切腹の場面である。

もろ手をかけ、ぐつぐつと引き回し、苦しき息をほつとつき、由良之助、この九寸五分は汝へ形見、わが鬱憤を晴させよと、切先にて笛はね切り、血刀投げ出し、うつぶせに、どうどまろび、息絶ゆれば、御台をはじめ並みみる家中、眼を閉ぢ、息を詰め、齒を食ひしばり、控ゆれば、由良之助にじり寄り、刀取り上げ、おし戴き、血に染まる切先を、うち守りうち守り、拳を握り、無念の涙はらはらはら、判官の末期の一句、五臓六腑にしみわたり、さてこそ末世に大星が、忠臣、義心の名をあげし、根ざしは、かくと知られけり、……御台はわつと声をあげ、さてもさても武士の身の上ほど悲しいもののあるべきか、いま夫の御最期に言ひたいことはやまやまなれど、未練など御上使のさげしみが恥づかしさに、今までこらへてゐたわいの、いとほしのありさまやと、亡き骸に抱きつき、前後も、分かず泣きた

まふ、力弥参れ、御台所もろとも亡君の御骸を、御菩提所光明寺へ、早々送りたてまつれ、由良之助もあとより追つつき、葬送の儀式執りおこなはん、

せりふだけでなく、情景描写も「語る」ことのできる浄瑠璃の作品であるため、元曲と一様に論ずることはできないが、それにしても臨場感溢れる「死」の描写である。特に、下線部分が残された顔世の追悼の言葉・しぐさであり、由良之助らが「葬送の儀式」を執り行うことも表現されている。途中省略した箇所、検使役の石堂右馬之丞が「葬送の儀式取りまかなひ、心静かに立ち退かれよ」と言うが、石堂は主役側の人物ではないにもかかわらず、罪人として切腹した判官を「葬送」せよと言うのである。

続いて、早野勘平の死の場面を見ておく。

サア思ひ置くことなしと、刀の切先咽にぐつと刺し貫き、かつばと伏して、息絶えたり、……コレ婿殿、母もともにと縋りついては伏し沈み、あちらでは泣き、こちらでは泣き、わつとばかりにどうど伏し、声をはかりに嘆きしは、目も当て、られぬ次第なり、

郷右衛門突つ立ち上がり、ヤアこれこれ老母、嘆かるゝは理なれども、勘平が最期の様子、大星殿にくはしく語り、入用金手渡しせば、満足あらん、首にかけたるこの金は、婿と舅の七々日、四十九日や五十両、合せて百両、百ヶ日の追善供養、後ねんごろに弔はれよ、さらばさらば、おさらばと見送る涙、見送る涙、涙の、波の立ち帰る人も、はかなき。

下線部分、残されたお軽の母の嘆き悲しむ様



が詳細に描写されており、立ち会った原郷右衛門も勘平から預かった金を「百ヶ日の追善供養」のためにと返し、先に殺された与市兵衛も共に「ねんごろに弔」うよう、言い残すのである。

最後に、加古川本蔵の死の場面である。

手負ひは今を知死期時、父様、申し父様、と呼べと、答へぬ断末魔、親子の縁も玉の緒も切れて、一世の、うき別れ、わつと泣く母泣く娘、ともに死骸に向ひ、地の、回向念仏は恋無情、出で行く足も立ち留り、六字の御名を笛の音に、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀。これや尺八煩惱の、枕並ぶる追善供養、 閨の契りはひとよぎり、心、残してへ立ち出づる。

本蔵は仇と思われたままわざと力弥に刺され、その後由良之助が現れると、判官を抱き留めたのは相手の師直が死ななければ切腹にもなるまいと思つてのことと疑いを晴らし、娘の祝言の引き出物にと師直邸の地図を手渡し、息絶えるのであるが、その場にいた本蔵の妻子は無論、由良之助も念仏を尺八の音に吹き込め、力弥と小浪も一夜限りの閨の契りも追善供養のためと、おのおの追悼の意を表すのである。

以上のように、判官・勘平・本蔵の3人とも、自ら命を絶つ点で「趙氏孤児」劇の4人の死に類似し、復讐のきっかけである判官の死と趙朔の死、復讐の成就に必要な本蔵の死と韓厥・公孫杵臼の死が共通している。しかし、その死に対する追悼の描写において、両作品は全く異なる。また、『仮名手本忠臣蔵』では、いずれの死にも仏教的な追悼方法（葬送儀礼や追善供養、念仏など）に関する描写がある。この点は、「趙氏孤児」劇はもちろん、いわゆる「仏教劇」以外の元曲作品には、全く見られない描写である。

追悼の描写、ないし仏教的な描写については、日本においては『仮名手本忠臣蔵』が特別なわけではない。一例に、同じく仇討物（復讐劇）の『曾我会稽山』における主人公の一人、曾我十郎祐成の死の場面（四段目）を挙げておく。

祐成が最期いかにと案ずべし、とく首討つて兄が最期清かりしと、悦ばせてたべ。仁田殿頼み入る、南無阿弥陀仏、みだ仏と、首差し伸べて目を閉づる、名指しの上は承る。御心やすかれと、太刀抜き持つて後ろに回り、振り上ぐれば、祐成が、首は前にぞおち方に、はや暁の八つの鐘、鳥も鳴く鳴く、人も泣く、音を鳴く千鳥の、直垂に、首よ、涙よ、包みても、洩れて名高き富士の岳、曾我、兄弟が会稽山、骸は裾野に埋めども、誉れは三保の松の風、他の国まで吹き伝へ、昔、語りを今の世の、人の、眠りを覚しける。<sup>14)</sup>

登場人物による追悼ではないが、追悼の表現であることに違いはない。また、死に際して念仏するという仏教的要素も、同様に見て取れる。

このような、大衆芸能である人形浄瑠璃作品における追悼の描写、あるいは「死」に関する仏教的な表現は、それを大衆（観衆）が求めていたということの裏返しでもある。すなわち、当時の日本人は、「死」に対する「追悼」はあつて然るべきと考え、なおかつ仏教的な追悼方法を一般に広く受け入れていた、と考えられよう。

## 6. おわりに

「趙氏孤児」劇と『忠臣蔵』の「復讐」の内容に関する比較研究は、近年中国で盛んに行われている<sup>15)</sup>。しかし、本稿で見てきたような、登

場人物の「死」に対する追悼の描写の有無に関する論考は見当たらない。

「趙氏孤児」劇と『仮名手本忠臣蔵』は、いずれも両国において実際に起こった歴史事件を題材とした復讐劇であり、「遺言」をきっかけとして復讐が行われるという共通点がある。また、その「復讐」の本筋よりも、周辺の人々の犠牲と死の場面の方が「見どころ」となっている点も共通する。これは、舞台芸術・視覚芸能に求められた、東アジア海域社会における、人々の娯楽に対する要求の現れとも言えよう。

一方、元曲「趙氏孤児」劇は登場人物の死に対する「追悼」の描写が簡素もしくは皆無で、人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』は逆に「追悼」の描写が詳細でかつ仏教的要素も多分に見られる。「追悼」の有無に関しては、象徴劇である元曲（元雑劇）と、写実劇に近い人形浄瑠璃や歌舞伎との、芸能の種類に基づく相違が影響しているとも考えられる。なぜなら、象徴劇であれば舞台上で登場人物が死ぬ場合すぐに退場し、「死んだ」ということを誰かがせりふで言う必要があるためである。第3章に挙げた例文の「○○が死んだ」という類のせりふもこれに当たる。また、遺体が舞台上に存在しないため、遺体にすがりついて泣くという『仮名手本忠臣蔵』に描かれるようなしぐさを行うことはできない。しかし、せりふ中に、死を悼む言葉や葬送を行うという内容を組み込むことは可能である。それらが無いということは、そういった「追悼」は元曲の作者や享受者（観衆）が必要と感じなかったということである。まさに中国人の死生観の一端がそこに表れているのではなかろうか。

人形浄瑠璃や歌舞伎は「人情」を描くことに力点を置いていと言われるが、主役側の登場人物の死を描く場合には、必ず「追悼」が描かれる。それが日本人の「人情」、もしくは死生観

の表れと考えることも可能であろう。

さらに、大衆芸能における仏教的な描写は、知識人である作者のみならず、その享受者である一般庶民の間にも、仏教的描写の必要性を無意識に求める土台、すなわち共通する死生観・宗教観があったと見なすことができる。これは、東アジアにおける仏教の文化的受容の相違を検証する上で、有用な一例となり得るであろう。

ただ、西洋の戯曲にも、「追悼」は描かれる。例えば、同じく復讐劇であるシェイクスピアの『ハムレット』では、ハムレットが最後に死ぬと、ホレイショーやフォーティンブラスが追悼の言葉を発し、葬送行進曲と弔砲が鳴る中、幕が下ろされる。ハムレットが王族であるため必要となる葬送の描写かもしれないが、西洋の近代演劇においても登場人物の死に対する「追悼」の描写があることが確認できる。つまり、日本の人形浄瑠璃や歌舞伎が特別ではなく、むしろ中国の古典劇にその特異性がある可能性が強いが、この点については今後の検討課題としたい。

#### 注

- 1) 『「海域交流与日中文学」国際学術研究会会議論文集』（『海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究』科学研究班、2013）、42～54頁。
- 2) 現存する版本としては、『元刊雑劇三十首』の「趙氏孤児」（元刊本）と、明の臧懋循撰『元曲選』の「趙氏孤児大報讐」（『元曲選』本）がある。両版本の間には字句の異同が多く、元刊本は全四折で、『元曲選』本は全五折になっているなどの改編も見られるが、物語の筋は同じであり、元刊本には「曲」の部分しかないことから、本稿では『元曲選』本を引用し、必要に応じて元刊本との異同を注記する。なお、本劇における元刊本と『元曲選』本の比較に関しては、赤松紀彦「趙氏孤児劇小論——元雑劇に於ける「悲劇」の一断面——」（『金沢大学教養部論集（人文科学篇）』第25巻第1号、1987）に詳しい。
- 3) 「趙氏孤児」劇はこれらの平話に取材しているという説もある。竹治貞夫「元曲趙氏孤児の構成」（『徳島大学学芸紀要（人文科学）』第3号、1953）参照。
- 4) 蘇英哲「元曲「趙氏孤児」の悲劇的性格について」

(『大正大学研究紀要』第72輯、1986)、赤松注2前掲論文のほか、陶君起編著『京劇劇目初探』(中国戲劇出版社、1963)など参照。

- 5) 史実と本劇の相違については、赤松注2前掲論文、竹治注3前掲論文のほか、西川芳樹「元代の歴史劇に於ける忠臣と奸臣の対立関係——『趙氏孤兒』劇、『五員吹簫』劇を手がかりとして——」(『関西大学中国文学会紀要』第33号、2012)などに詳しい。
- 6) 元刊本では第五折が無く、復讐の場面が存在しない。
- 7) 原文は、「【么篇】落不的身埋在故丘。(云)公主，我囑付你的說話，你牢記者。(旦兒云)妾身知道了也。(趙朔唱)分付了腮邊雨淚流。俺一句一同愁。待孩兒他年長後。着與俺這三百口。可兀的報冤讐。(死科，下)」。なお、太字は曲辭、【】は曲牌、( )はト書きを表す。句読点は筆者。以下同様。
- 8) 元刊本では趙朔の脚色は「正末」となっている。
- 9) (旦兒云)駙馬，則被你痛殺我也。(下)(使命云)趙朔用短刀身亡了也。公主已囚在府中，小官須回主公的話去來。(詩云)西戎當日進神獒，趙家百口命難逃。可憐公主猶囚禁，趙朔能無決短刀。(下)
- 10) ……程嬰，你一向在俺趙家門下走動，也不曾歹看承你。你怎生將這個孩兒掩藏出去，久後成人長大，與他趙氏報讐。……(做跪科，云)程嬰，你則可憐見俺趙家三百口，都在這孩兒身上哩。(程嬰云)公主請起。假若是我掩藏出小舍人去，屠岸賈得知，問你要趙氏孤兒，你說道，我與了程嬰也。俺一家兒便死了也罷，這小舍人休想是活的。(旦兒云)罷，罷，罷。程嬰，我教你去的放心。(詩云)程嬰心下且休慌，聽吾說罷淚千行。他父親身在刀頭死，(做拏裙帶縊死科，云)罷，罷，罷。爲母的也相隨一命亡。(下)(程嬰云)誰想公主自縊死了也。我不敢久停久住，打開這藥廂，將小舍人放在裏面，再將些生藥遮住身子。天也，可憐見趙家三百餘口，誅盡殺絕，止有一點點孩兒。我如今救的他出去，你便有福，我便成功。若是搜將出來呵，你便身亡，俺一家兒都也性命不保。(詩云)程嬰心下自裁割，趙家門戶實堪哀。只要你出的九重帥府連環寨，便是脫却天羅地網穴。(下)
- 11) 【賺煞尾】能可在我兒身上討明白，怎肯向賊子行捱推問。猛拚着撞階基圖箇自盡。便留不得香名萬古聞。也好伴鉏耒共做忠魂。你，你，你要慇懃。照顧晨昏。他須是趙氏門中一命根。直等待他年長進。纔說與從前話本。是必教報讐人。休亡了我這大恩人。(自刎，下)(程嬰云)呀，韓將軍自刎了也。則怕軍校得知，

報與屠岸賈知道，怎生是好。我抱着孤兒須索逃命去來。(詩云)韓將軍果是忠良，爲孤兒自刎身亡。我如今放心前去，太平庄再做商量。(下)

- 12) 【鴛鴦煞】我七旬死後偏何老。這孩兒一歲死後偏知小。俺兩個一處身亡，落的個萬代名標。我囑付你個後死的程嬰，休別了橫亡的趙朔。暢道是光陰過去的疾，冤讐報復的早。將那厮萬箇千刀。切莫要輕輕的素放了。(正末撞科，云)我撞塔基，覓箇死處。(下)(卒子報科，云)公孫杵臼撞塔基身死了也。(屠岸賈笑科)那老匹夫既然撞死，可也罷了。
- 13) 『仮名手本忠臣蔵』については、祐田善雄「『仮名手本忠臣蔵』成立史」(『国文学 解釈と鑑賞』第32巻第13号、1967.12)、土田衛「『仮名手本忠臣蔵』以後の義士劇」(同前)、横山正「操評判記に見る『忠臣蔵』の評判」(同前)、藤野義雄『仮名手本忠臣蔵 解釈と研究』全3巻(桜楓社、1974～1975)、古井戸秀夫「義士・不義士銘々伝——『仮名手本忠臣蔵』の人物造型——」(『国文学 解釈と教材の研究』第31巻15号、1986.12)、野口武彦「復讐論の系譜——中国から日本へ——」(同前)などを参照。なお、本稿における『仮名手本忠臣蔵』の本文は、鳥越文蔵他校注・訳『浄瑠璃集』(新編日本古典文学全集77、小学館、2002)から引用。
- 14) 鳥越文蔵他校注・訳『近松門左衛門集③』(新編日本古典文学全集76、小学館、2000)、443～444頁。
- 15) 周萍萍・李剛「試論中日伝統復讐文化——以『趙氏孤兒』与『忠臣蔵』の比較分析為例」(『日語学習与研究』2008年第1期)、張静「中日戲劇論創作之美学觀比較——以『趙氏孤兒』和『忠臣蔵』為例」(『広東工業大学学报(社会科学版)』2010年第2期)、莫文沁「生之美学与死之美学——『趙氏孤兒』与『忠臣蔵』美意識之比較」(『湖北第二師範学院学报』2010年第9期)、同氏「從『趙氏孤兒』与『忠臣蔵』看中日伝統“家”制度」(同誌2011年第4期)など。ただ、これらの論考はすべて『仮名手本忠臣蔵』ではなく『忠臣蔵』＝元禄赤穂事件として論じている。

【附記】本稿は平成23～25年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)「海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究」の研究成果の一部である。

